
明日また空の下で

藤森優斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日また空の下で

【Nコード】

N9695C

【作者名】

藤森優斗

【あらすじ】

俺はいつもこの桜の木の下で待っている。その時が来るのを。今ではこうも思う。「俺は桜の木の下で彼女を待っていた」興味が湧かない学校生活。面倒な事は一番避けたい性格。そんな俺でも神様っていうのは出会いをくれるという事を知った。彼女の全てを背負う。そんな物語が俺にも出来るのだろうか。俺の人生は確実に変わっていく。良い方向にも、悪い方向にも。―生きる力を貰ったよ。だから、全部お前に返そうと思う―

1章 桜舞う出会い

晴天快晴。そんな言葉が似合う今日の空。

俺はいつもそんな空を眺めている。

もし、俺と彼女が出会わなかったら、俺の人生はこんなにも苦しくて辛いモノにはならなかったと思う。でも、彼女に出会えて俺は嬉しかった。

―生きる力を沢山貰ったよ。だから、そいつは全部お前に返そうと思う―

1巻 1章 桜舞う出会い

桜の木の下。四月を過ぎ花びらが散る木の下。

俺はいつも此処で待っている。別に誰かを待っている訳ではない。学校のチャイムが鳴るのを待っているのだ。

朝のホームルームの終わりを告げるチャイムを待っている。

でも、今思うと本当に誰かを待っていたのかも知れない。彼女を待っていたのかも知れない。

「あの……もう学校は始まっていますよ？」

「ん？」

そこに居たのは小さな小柄の女の子。俺が通っている学校と同じ制服、という事は……この紺色のリボンだし同級生らしい。でも、こんな奴初めて見た。

「すみません！ でも学校はもう始まっています。急いで行かないと……」

「ああ、俺はいつもだから。それよりお前が早く行けよ。遅刻は進学の敵だぞ」

「私も、いつもの事ですから……」

「お前もか？ 学校はちゃんと行かないと駄目なんだぜ？」

俺は態と意地悪に言ってみた。こういう静かで天然っぽいキャラの奴を弄るのが楽しいからだ。

「そうですね……やっぱり学校はちゃんと行かないといけませんよね……」

「ああ、そうだ。だから急いで行けよ」

「はい、頑張ります！ ってあなたもじゃないですか！」

今頃気付いたのか？ やっぱり天然という生き物は面白い。

俺は寄り掛かっていた桜の木から離れ立ち上がり、彼女を見ないで歩きだした。

「ほら、そろそろ行かないと授業にも遅れるぞ」

「はい！」

そう、彼女は元氣良く返事をして俺の後ろを追って歩いている。

珍しい子だな。素直にそう思った。

この出会いが俺の人生を変えるきっかけになった。

良い方向にも、悪い方向にも。

そのまま会話も無しに学校に辿り着いた。

俺は高校二年生。二年専用の下駄箱に行く途中、彼女が止まって
呟いた。

「ありがとうございます……」

「何だよ、急に改まって」

「私、今まで此処に来る事がなかなか出来なかったんです……」

「何故だ？」

「何故でしょうね」

それは俺が聞いたんだよ。分からないから聞いたのに当本人まで知らないとはね。まあこの話は無かった事にしておこう。今はね。

「じゃあ、早く行こうぜ」

「はい！」

―そして俺達は歩き出す。出会った運命の分、それらを返すために―

彼女は俺のクラスの二つ隣のクラスらしい「私はこっちなので……」と言って廊下を歩いていったから。学校では見た事無かったんだけどなあ……

「おい、正晴。また遅刻か？」

「実は朝、小さい女の子が急に目の前で倒れて病院に運んできたんだ。そしたらなんと、その女の子が生き別れの妹だったんだよ！」

「マッ、マジかよ！ お前……そんな複雑な家庭だったのか。それより妹だったって本当かよ？」

「嘘だ」

「この野郎！ いつから嘘なんだ？」

「始めから全部嘘だ」

「チクショ―、騙された……」

この、あまりにも馬鹿な奴が俺の親友、隅原幸助。すみはらこうすけ唯一の友人と言っても過言ではないだろう。俺は人付き合い悪いからな。

「お前だって今日、遅刻してない事は珍しい事だろ」

「まあそうなんだけどねえ」

俺達は似た者同士だ。こいつを見ると「俺ってこんな感じなのか……」とショックを受ける事も多々ある。

授業を受けに来たと言っても話は全く聞いてない。聞く気がないという理由でもあるし、とりあえず面倒だから。

国語の教師が何だか分からない古文を読んでいる中、俺は校庭を眺めていた。

二年の教室は四階建ての校舎の四階、つまり一番上の階に位置する。だから、教室の窓際に席を置いている俺の位置からは校庭が良く見える。

今は何処かの二年のクラスの体育らしい。知らない顔の奴が何人

もいる。知っている顔も少数人ながらいた。

その校庭の端、サッカーか何かやっている横の方で知っている顔が膝を抱えて座っていた。

今日、朝会った彼女だった。どうやら見学をしているらしい。

どっか怪我でもしているのか？ そんな事を思ったが俺には関係のない話だ。別に気にする事もないだろう。

何も考えず寝たりして過ごした午前の授業。終了を告げるチャイムが鳴る。という事は……昼食だ。

「幸助、この五百円玉をやる。だから、カツサンドを買って来い！ 釣りはいらねえ」

「よっしゃー、任せとけ！ 俺の分も買って来てやる！」

そう言い残し、幸助は購買部へと走っていった。この時間が一番混む頃だろう。そう考えていた俺は予め、朝コンビニでパン一つ買って来てあった。予備に、と思っていたけど、どうやらこちらが主になりそうだ。

なかなか幸助が戻ってこないから俺はその辺を歩き出した。外に出たり、廊下を周ったり、結局本当に暇になったから屋上に行った。偶然だろうね。俺は屋上に行く事を予定などしていなかった。だから偶然だと信じたい。そこに彼女がいた事を……

ー今思うと、偶然では済まされない出会いを俺はしていたー

2章 屋上、思い出の場

2章 屋上、思い出の場

屋上。そこに彼女はいた。

一人でベンチに座りパンを食べていた。

あのベンチは入学当時、俺と幸助が校庭にあったのを運んだものだ。放課後の校舎内、ベンチを屋上に持っていくのは一苦勞なんて言葉じゃ済まない程大変だった。誰にもバレないようにするのは特に一番大変だった。でもその困難を乗り越えた結果、屋上で寛げるようになった。そのベンチの上に彼女が座っている。

「よっ、また会ったな」

「あなたは……朝の……」

「そういえば名前教えてなかったな」

「はい、私もまだ教えていませんでした」

朝会った時は教える必要はないと思ったが、これが偶然じゃないとするなら、今教える必要があるだろう。

ふるかわまさこはる

「古河正晴」

「正晴くん？　ですか……はい、覚えました！」

「お前は？」

「私は、なぎあいこ風愛子です。お母さんとお父さんが、人を愛せる子になるように。」

つけてくれた名前です。自分ではとても気に入っています！」

風愛子かあ。確かに見た目にあった名前だな。名前の意味かあ。

俺は何なんだろうな、聞いた事がない。

「そうかあ。っで早速だけど風」

「はい、何ですか正晴くん？」

「何で一人で食べてんだ？」

「それは……」

「ああーいい、いい。やっぱり答えたくていいよ」

「そうですか」

人の悩める場所を探っていく程冷たい人間じゃない。きっとこいつは友達が居ないんだろう。良く見ると可愛い顔してんだけどな。静かだし、誰かと盛り上がったたりするのがたぶん苦手なタイプだろう。俺もそうだからな。気持ちに分からなくもない。俺の場合、自分から人との馴れ合いを避けてるんだけどな。

「おい、風はなんか部活とか入ってるのか？」

「前は入っていました。でも入部してすぐに辞めちゃいました……」

「理由は？」

「参加出来なかったからです……」

「そりゃ入った意味が無いな」

「はい、無駄死にです」

それはちよつと意味が違う気がするけどな。

「つで今はやる事の無い暇人か？」

「ごもっともです」

時折使う言葉の意味が違う気がするけど、まあ 気にはしない。

「何部に入ってたんだ？」

「何だと思います？」

見た目は小さくて可愛い顔立ち。体力は有りそうも無いから文化系か……

「そうだな……見た感じだと、演劇部とかブラバンとかか？」

「どっちもハズレなのです」

「じゃあ、園芸部」

「それもハズレなのです」

「もしかするとバレーとか野球とか……」

「全部大ハズレなのです！」

「じゃあ何部だよ？」

「何部だと思います？」

その質問はさっきもされて、撃沈したんだけどな。まだ俺を戦わ

せるつもりか？

「もうギブアップだ。正解はなんだ？」

「写真部です」

写真部？ 写真部で退部かよ。それほど酷い仕打ちを受けたのか、はたまたかなりの面倒臭がりなのか……どっちにしる辞めた事には変わりないか。

「何で写真部に入ったんだ？」

「写真を撮るのがただ好きだったんです。動物を撮ったり昆虫を撮ったり……ああ、でも足が沢山ある虫と変に飛ぶ虫は違いますよ！怖くて近寄れないです……一番撮るのが楽しかったのは景色です。いつも撮っていました！」

虫の話は……まあ無かった事にはしよう。

好き、かあ……夢中になれるものがあるだけいいよな。俺なんて……ね。

「今も撮ったりしてるのか？」

「はい！ いつもこの鞆の中に入っています！」

そこにあっただのはカメラだった。けど……ちよいと古いタイプじゃないか？

今はデジカメやら、写真家なら高そうなカメラを使うだろうけど、風が持っていたカメラはまた古い。やっ和外に持ち歩きが可能になった時のカメラみたいだ。

「でも……このカメラ壊れちゃいました……」

だろうな。そうなると思うぞ、その古いカメラじゃね。

「だから、今はこっちの使い捨てカメラで撮っています。こちらでも綺麗に撮れるんですよ！」

「一日何枚くらい撮ってるんだ？」

「三枚と決めています！ カメラの値段も無視出来ないものですし、私の限界もありますから……」

「限界……？」

「何でもありません！ こちらの話です！」

気になってはいるが無理に聞き出すのも失礼だし、我慢して聞かなかった事にしよう。

「今日は何か撮ったのか？」

「はい！ 二枚撮りました！」

「何を撮ったんだ？」

「朝、正晴くんが寝ている姿とさっきこの青空を撮りました！ 二枚とも、とても綺麗に撮れました！」

「おい、待て！ 俺の写真は現像するなよ！」

「何ですか？」

「何でもだ！」

いつの間に撮られていたんだ。気付かなかった……本を顔に載せていたから気付かなかったのか。

その時……

「正晴……俺は頑張った…誉めてくれ……ああ」

そこには見るに耐えないくらいフラフラした幸助の姿があった。片手にカツサンドと何やらパンが入っていそうなビニール袋を持っている。

「おーサンキュー幸助」

「このくらい、何て事ないさ……」

そんな事を言いながら倒れた体を起こそうとした幸助はそこにいる小さな少女の姿を見た。

「全く、正晴ったら学園一モテモテで人気ナンバーワンの僕を買い出しに行かせるなんて……この美貌を汚している……そう思いませんか？ お嬢さん」

「お嬢……さん？」

これがこいつの性格だ。女好きで格好つけ。嘘までついて自分をアピールし一目惚れさせようとする。本当のバカだ。結局、俺が知っている範囲では一人も良い返事は返していない。

「正晴くん……この変わった人はどなたでしょうか？」

「ただの変態、ナルシスト、馬鹿という名を作り上げた奴だ」

「変態……ナルシスト……」

「ああ、違う！俺は正晴の親友で隅原幸助」

「っと、嘘をつくような奴だ」

「待て！親友って所と名前は嘘じゃねえ！」

「とても……愉快な人です！」

こいつは本当にお人好しなんだな。こんな幸助にまで優しくするなんてね。そんな女子生徒は初めて見たよ。普通は「変態！」とか「キモいんだよ！」とか言う奴が多いけど、風は違った。

幸助も嬉しいに違いない。……うわっ、顔が輝いて見える。余程嬉しかったのだろう……

「正晴くん……あと、ついでに隅原さん、とりあえず昼食にしましょう！」

風が積極的に誘ってきた。これはもしかしたら珍しい事なのかもしれない。目を瞑り頑張って言ってみたんだ。

「ああ、さっさと食おうぜ」

俺はそう言ってベンチに腰を下ろした。幸助が買ってきたカツサンドを食べ始めた。

その幸助はと言うと……手を下につけ、かなり落ち込んでるような姿を見せていた。何故落ち込んでいるか、俺には分かっている。さっき風が「ついでに隅原さんも」と言った事だろう。「ついで」がついたから落ち込んでるのだろうか。気にするなって。

そして俺達は昼食を済ませ、教室へと戻っていった。

最後に風が呟いた言葉が耳に残る。その言葉は、幸助が落ち込んだままで俺と風が昼食を食べ終わった時、「此処から見る景色、綺麗ですよ。特に空がとても綺麗です！」そう言った。

俺と同じ空を見ているのに、目の輝きとかが全然俺と違う。風に髪を靡かせて、真っ直ぐ前を見て言った言葉。俺には『俺が見ている空と違う空を見ている』、何故かそう感じた。

—同じ景色でも人によって見える景色は違うのだろうか—

3章 空白の休日

3章 空白の休日

俺が彼女について知っている事は数えられる程しかない。たぶん、片手の指の数程だろう。

まず一つ目、名前が風愛子という事。二つ目、写真部に所属していた。三つ目、そして退部した。四つ目、今でも写真を撮っている。五つ目、景色が好き。それくらいだ。虫の話とかもあったけど、それは例外という事にして……まあ沢山知っていてもストーリーカーみたいだし、幸助のようにはなりたくないからな。

出会った日から一週間、あの日から毎日のように朝、一緒に学校に行くようになった。勿論、俺はチャイムが鳴るのを待っている。今は意識的に風を待っている事はない。気付けばいつも来ている感じ、出会った日と同じようだ。

だが、一週間の内、一日だけ来なかった日があった。学校にもだ。まあ、その日は風邪か何かで休んだのだろう、そう思っていた。そう思う事は一般的な思考として間違いではない。確かにそうだろう。でも、その『一般的』では駄目だと気付いたのは後になってからだった。

それからまた、一週間。風は一日休んだ。まあ、俺には関係無い。そう考えてはいたけど、いつの間にか、俺の体は朝一人で居る事に悲しみを覚えた。常の事だったはず、当たり前前の事だったはず、なのに一人で歩くこの道に、何か物足りなさを感じていた。

「どうした事やら……」

「なあ正晴、今日風ちゃん休みか？」

「ああ、そうらしいな」

「ああ、会いたいよ、愛しのマイエンジェル！」

凧はいつからお前の天使になったんだ？　なあ、幸助。

そんな事しか話題もない昼食の時間。いつものように屋上にいる。今日もまた、綺麗な快晴だ。

きつと、この空を見て思ってしまったのだろう。

放課後、俺は凧の家の前にいた。幾つも花が並ぶ花屋。凧の家はそこにある。

俺の家から自転車で十分くらい、意外と近い場所にあった。

俺が何故、凧の家を知っているかと言うと、それは先週、共に屋上にいる時……

「正晴くん」

「なんだ？」

「正晴くんはお花は好きですか？」

「花？　何だよ急に」

「私の家、お花屋さんなんです！　沢山お花があります。もし、正晴くんの好きな花があるなら、差し上げようかと考えたのですが……」

「それは有難い話だな」

「では、今度お家にいらっしゃってください。待っていますから」

「ああ、暇があればな」

「はい！」

本当は暇しくないような人生を送っているのに、俺も格好つけたもんだな。だから、今日俺は来てみた。聞きたい事もあるから。「公園の近くにあるお花屋さんです！」そう言っていた。

「此処だよな……」

俺はやや控え目に中に入った。特に花を買うわけでもないのに、というか、花屋に来るのは初めてだ。

「いらっしやいませ！」

そこに立っていたのは若いお姉さんだった。凧の姉か？

「どのようなお花をお選びですか……ん？ その制服はもしかすると愛子のお友達ですか？」 「まあ、一応知り合いですかね」

「あらあら、お友達がお家にいらっしゃるなんて、初めてです！ お母さん、感激です！」

お母さん？ こいつは風の母親か？ お姉さんとかじゃないのか？ 確かに顔とか髪型が似ている。にしても若いだろ、俺にはまだ二十代に見える。

「ずいぶんと若いんですね」

「あらあらなんて良い子なんでしょう」

「そんな事無いけどな。ただの一般男子生徒だ」

「そうですか。っでどんなお花を探しているのですか？」

特に花なんて探しちゃいないんだけどな。来た理由なんて、暇だった。とか、通り掛かった。って感じだし。いやっ、今のはただの強がりだ。聞きたい事があるから来たんじゃないか。

何故、俺はこんな事してるのだろう。俺でも不思議に思うよ。

「花には別に用はないな」

「じゃあ、何かお話でも？」

「ああ、一つ聞きたい事があってな」

「何でしょうか？」

風の母親は覗き込むように俺を見てきた。ちよっと言いにくいけど、仕方ないか。

「風は何で必ず一週間に一回休むんだ？」

「それは……愛子とは、どのような関係ですか？ ボーイフレンドとか？」

ボーイフレンド？ それは程遠い呼び名だな。ただ、朝同じ道を歩いて登校してきているだけ、昼食は共に屋上で食べているだけ。

「だから、ただの知り合いだよ」

「では、失礼ですが愛子の事は説明出来ません……」

「何故だ？」

「貴方が嫌な想いを背負ってしまいます。だから、この話は聞かず

にお帰りください……」

「そうか、分かった。じゃあな」

「あの、もし良ければまた遊びにいらっしゃってください！」

「いつか、な」

そう言い残して俺は歩いていった。そうだよ、俺には関係無い話なんだ。無理に聞く事もないし、知ったからといって、どうする訳でもないだろう。

「すみれ」

「勘太郎さん……」

「さっきの奴誰だ？」

「愛子のお友達のようにです」

「何の用だったんだ？」

「何故、愛子は一週間に一回休むのか、と……」

「それで、言ったのか？」

「いいえ、彼を悲しませる訳にはいきませんから……」

「そうだな、それでいいんだ」「はい……」

今日は綺麗な茜空だ。真っ赤に染まった空の下、上手く整理がつかない心の中。俺には関係無いはずなんだ、そう思っているのに。胸を打つ疑問。

――風、お前もこの空を見てるか？　綺麗だぞ。お前のカメラで残してくれよ――

4章 スライド、画の訳

4章 スライド、画の訳

今日、また一週間が始まる。

いつものように学校へと歩いて行く。後ろに風を付けながら。

学校内では、何やら俺が風と付き合ってるのでは、という噂が回っているらしい。

まあ、はっきり言う俺も風も目立った存在ではないので、その話はスルーされる程どうでもいいような話だ。話題になっても興味を示す者が居ない。

付き合ってる。幸助には良く言い聞かせている。あいつが一番うるさいからな。

風はお前の物では無いと思うぞ。女好きは仕方ないか。

休み時間。

特にする事も無く、席から外を眺めている。今日は生憎の雨だ。

校庭には大きな水溜りが幾つも出来ている。学校って暇だな・・・

「古河！」

「ん？」

「古河正晴！」

「何だよ、委員長」

「アンタ、今日、日直でしょう？　なのに遅刻してきて仕事もしない。委員長の私がアンタの代わりに仕事をしている。学校に来ているのに仕事をしない。おかしいと思わない？」

「ああ、なんせお前は委員長だからな。仕事の出来ない奴の代わりは当たり前だ」

「ふざけるなっ！」

痛え……この野郎、腹蹴りやがって……

こいつ、俺のクラスの委員長、たちはなみずき橘瑞希。

何かと几帳面な性格で他人に厳しい。見た目はこう、ツインテールで身長はそこそこ高くて、体育会系って感じ、平均よりは可愛い。っていうか周りから見るとかなり可愛いと思う。性格さえ良ければね……

まあ、これこそ人は見た目に寄らず。ってやつだな。その言葉はこいつの為に作られた言葉なのかもしれない。

仕方ない……

「わかったよ、やればいいんだろ、やれば！」

「私に逆ギレなんていい度胸ね。まあいいわ、やればいいのよ。しつかりね」

「はい、はい……」

面倒臭い……

そんな事を言いながらも日直の仕事を遣り終えた。

俺はそろそろ帰ろうか、と思い、下駄箱へと行き靴を取った。その時。

「正晴くん！」

「なんだ？」

そこには凧が居た。俺の目の前。玄関から出ようとした俺を拒むように立っている。

その手にはインスタントカメラが握られていた。大事そうに、両手でぎゅっと。

「これから写真を撮りに行こうと思うんですけど……」

「それは良かったな。早く行って来い、陽が沈まない内にな」

「正晴くんも一緒に行きませんか？」

「俺も、か？」

「はい！ 正晴くんも是非！」

俺が行く意味はあるのだろうか。写真は一人でも撮れるだろう。

逆に一人の方が邪魔者は居ないし、撮り易いと思うんだけどな。それは俺だけか？いや、皆、それが大多数だろう。

「何故、俺も行くんだ？」

「それはですね……見てもらいたいですよ」

「何をだ？」

「写真を撮っている私の姿を」

「姿って……」

「じゃあ、行きますよ！」

「ちよっと、待てよ！」

そうして俺は誘われたのに強制という形で写真撮影に同行する事となった。

その理由。一番気になる所だ。詳しくは聞いていない。聞き出せない。姿を見ていて欲しいって？ 何だその理由。理解が全く出来ないぞ。

「今日はまだ一枚も撮っていないんです！ だから、これから選別に選んで、特別な三枚を写真に残したいと思います！」

そういえば、何故三枚なのかも聞いていないな。全く、理解が出来ない事が沢山積み上がっていく。崩れないように支えるのが精一杯だ。

そんな事を考えながら、仕方ない。俺は風について行く事にした。どうせ、俺は暇な人生を送っているんだ、このくらい暇潰しで持つて来いだしな。

外は雨も上がり、晴れていた。

「まずは……このタンポポを撮ります！ 今、アリが乗っていて可愛いです！」

そう言うってから、パシャリ。風はタンポポに乗っているアリ、をフィルムに納めた。俺もその姿を頭の中に自然と保存する。いつかは消えるだろうけど。

外は気付かぬうちに紅く染まりだした。綺麗な紅色。俺でも見惚れそうだ。

「二枚目はこの空にします！」

凧は芝生に寝転び、仰向けでカメラを構えた。そして、パシヤリ。また一枚良い写真が撮れた、そんな満足そうな顔をしている。

「あと一枚、何を撮るんだ？」

俺がそう言って凧を見た瞬間！

パシヤリ。

「何やってんだ！」

「最後の一枚は正晴くんです！」

撮られた……写真を撮られたのは二度目だ。凧は万遍の笑みを零して、俺を見ている。可愛い顔しやがって、肖像権ってモノを知らないのか？

それから、何分か経った。

俺と凧は、空を撮ったときの様に仰向けになっていた。隣同士、距離は少々あるが。

そして無言のまま。きっと俺も間がさしてしまったのだろう。凧にある質問をしていた。

「なあ、凧」

「何ですか？ 正晴くん」

「何で毎日、三枚しか撮らないんだ？」

「それは……」

「教えてくれ、そうしないとお前の写真を意味が分からないんだよ」
「でも……」

凧は落ち込んだような声を出し、また沈黙。顔は見えなくても想像が付く気がした。きっと、暗い顔をして空を見ているのだろう。

「分かりました。少しなら……」

「ああ」

「私が三枚しか撮らない理由、それは……一日を確かに示す物を残したいからです」
「??」

「意味分かりませんよね……私は一日一日をとても、とても大事に生きています。目の前にゴールが近いから、他の皆さんと比べてゴールが近いから……使い捨てカメラ、枚数は27枚。一日三枚で9日間です。区切りよくしたいから、私の証拠を残したいから……9日間、それが私の毎日の記録。カメラ代も笑いものではないんですよ」

何を言っているか、今の俺にはまだ、理解が出来なかった。

その先背負う、人の心、存在、命。

それに気付けていたら大分心も落ち着いただろう。

もしかしたら、気付いていたのかも知れない。

――茜空、その赤に染められた言葉の形、本当は分かっていたのかも知れない。

彼女の真実を。俺が焼き付けた姿、それはいつかは消えるけど……―

5章 夏に見る夢、大切な物

5章 夏に見る夢、大切な物

あれから俺と風は、それぞれの家に帰った。

無駄な事は口にせずに、ただいつも通りに会話して別れて行った。本当は気になる事とか山ほどあるけど、俺には風が言った事がなんとなく理解出来たような気がしてきた。根拠は無い。詳しくも分からない。でも、あいつは確かに……

そろそろ夏。陽射しも強くなってきた。学校に行くにも、歩くだけで暑い。それと、もう一つ嫌な事が俺達を待っている。そう、この時期、テストだ。

なんと今日、俺はその難敵に退治する事となっている。負ける事は決まっているようなものだ。悪足掻きでもするかな。

そして、敵は去った放課後。撃沈した脳内が悲鳴を上げている。分かっていたとは言え、この感触は慣れる物じゃない。

「なあ正晴、テストどうだった？」

「幸助こそ、どうだったんだよ？」

「俺はなあ、分かってるように赤点確実。敵はやはり強し……」

「まあ、俺もそんな所だ」

同じような奴っているのは意外と身近に居るものだ。学校自体、ただ通っているだけだけど、自分の実力がここまで点として馬鹿にされるのは嫌な物だ。実に醜い。

俺が家に帰ろうとする時、そいつはいつもやって来る。

「正晴くん！」

「今日は何の用だ？」

少し強めに言ってみた。

「一緒に屋上に行きませんか？　今、空がとても綺麗ですから！」

「行かないと駄目、だろ？」

「はい！」

全く。俺は一体何のために……

屋上、そこは俺の聖地。一番落ち着く場所だ。

たぶん、凧もそうなんだと思う。此処は落ち着く場所なのだろう。

凧はカメラを構える。

紅く染まった空目掛けて。

その時だった。

……………

「凧！　おい、凧！」

「だ、大丈夫です……ちょっとめまいがただけで……」

「めまい？　そんな前触れはなかったぞ！　おい、俺に何か隠してないか？」

「何も……隠していませんよ……」

「嘘付くな！」

一週間に一回休む。

親はその理由を言ってくれない。ただの友達には駄目だと言う。

その時、俺は何故か変な気持ちだった。ただの友達？　俺は凧にとってそんな存在なのか？　凧は何故、一回休むんだ？　俺の気持ちは何なんだ？

その答えは、この先にある。

「もう、大丈夫ですよ、正晴くん……」

「凧……」

「ま、正晴くん？」

夕日に染まる二人の姿。密着している姿。抱擁。影が見える。二人一つに見える姿。

俺、何やってんだろ……でも、体が動くんだよ。勝手に俺の神経やら筋肉よりも、気持ちの方が勝った証拠だな。

「俺、風が好きだ」

「正晴くん？」

「俺、風愛子が好きだったんだ、今気付いたよ。俺は風が好きだ」

「正晴くん……」

「……………」

「私も……正晴くんが……好き……です……」

……………

此処は病院。

風が通っている病院らしい。

屋上で見た姿。

それは、本当の風だった。

その日、俺は三枚の写真を使い捨てカメラに残した。

―お前の全てを背負ってやる。だから、お前は俺の想いを背負ってくれ―

それだけでも、俺は嬉しいから。

6章 涼しい夏

6章 涼しい夏

病院の中はやたらと寒い。

身が凍えるほどだな。もう少しエアコンの温度を考えた方がいい。温度調節の仕方を教えてやりたいな。

あの日から1週間。

俺と凧は病院の一室にいる。大型病院。滅茶苦茶デカイ病院の4階の部屋に凧の病室はある。まあ8階建てくらいデカイ病院だからまだ4階はいい方だけど、この階段を昇るのは面倒だ。一々来るのも帰るのもこんな階段数が多いところを往復して、だるいな。

今日は日曜日。

俺は凧のお見舞いに来た。変なおマケも付いて来ているが。幸助に瑞希。

幸助はなんとなく分かるが、何故瑞希もだ？ こいつは凧と何か関わりあったっけ？ いや、ないだろう。

凧の病室のドアを開ける。

ガチャッ。

「よお、な……」

「ああ、愛子！ 久しぶり！」

「瑞希ちゃんだ！ 久しぶりです」

ん？ 何だこの慣れ親しんだコミュニケーション。凧が俺以外の奴と仲良く話しているのは初めて見るぞ。どういう関係なんだ？

「あのおく盛り上がっている所申し訳無いのですが……お二人はどういったご関係で？」

と、何故か幸助が聞いた。お前は「俺の愛子ちゃんが……」とか思って聞いたのだろうか。

「知らないの、隅原？ 私たち親戚なのよ。いとこかな。ねえ愛子！」

「はい。その通りです」

何故同じ学校にいる親戚なのに「久しぶり！」なんだ？ 気になるな。

「でもさ、何で久しぶり！ って言ったんだ？」と、また幸助。

「私、委員長で忙しいし愛子は学校来ない時あるし」

「そおかい」幸助、聞いたという興味ないのかよ。

「あのー正晴くん……」

「何だ？」

「ありがとうございます。助けてくれて」

「ああ、いいって」

「あと……屋上で言った……」

「ちよーと待て！ 待て待て待て！ それは言うな！」

まずいぞ。その事は今言っではいけない。絶対に今言っではいけない事なんだよ、風愛子さん。言わないでくれ……

「屋上でって何の事だ？」さっそく幸助。「ええーアンタ愛子に何したの？」そして瑞希。誤解だ。いやらしい事なんてしてないし、お前等には関係ない！

「ちよつと二人とも少しの間病室から出てくれ」

「おい……正晴、まさか病室でやる気じゃ……」

「なんもしねえ！ いいから出てけ！」

やっこの思いで追い出した。全く、面倒な奴らめ。

「ごめんなさい……私が……」

「いや、大丈夫だから」

「それで……あの、正晴くんは私の事が好きと……」

「ああ、言ったよ。それは本当の事だ。俺は風が好きだよ」

「そうですか……ありがとうございます……」

「嫌なら嫌って言ってくれよ」

「いえっ、私、嬉しいです。私も正晴くんの事、好きですから……」

「あ、ありがとう……」

「はい……」

「なんか照れるな」

「そうですね」

そして、しばしの沈黙。顔を赤くする二人。やっぱり照れるな……その時。

「もう終わったか？」と二人が入ってきた。

「終わるも終わらないも何も無いけどな」

「全く……私の妹分を……」こいつ何言ってるんだか。

そして、仲良く会話をしていると、ガチャ。

「風愛子さん。検査があるのでこっち来て下さい」と看護師さんが来た。

「じゃあ、俺達は帰るな。また来るよ」

「はい。今日はありがとうございました」

「じゃあねえ」と俺達は病室を出て階段を下り、外に出た。

「古河。アンタやっぱりの噂は本当だったのね」

「何の事だ？」まずいぞ。

「俺達さあドア越しからお前達の会話聞いちゃった!」

「はっ?」ヤバイぞ……

「皆には黙っというてあげるよ。仕方ない、委員長の私がクラスメイトを苛める訳にはいかないからね」

「僕、隅原幸助は友人に愛しき愛子ちゃんを奪われました……ショック……」

「お前等……!!」

そして、その日は過ぎていった。

検査が終わり、ベッドの上で微笑む風愛子。

家に着き、ベッドの上で微笑む古河正晴。

幸助と瑞希が知らない事が1つある。

それは、あの沈黙の時間。俺と風がキスをしていた事だ。
音のしない愛情。それだけはいつ等にも俺と愛子にも聞こえて
いなかった。

でも心の声が聞こえた気がした。俺と愛子にだけ。
二人とも、

ファーストキスだった。

俺は風の病氣を知っている。
もう……って事も。

―俺の気持ち溜まった届け物だよ。お前の唇に届けたから、ち
ゃんと受け取ってくれ―

7章 重ねて、最後の贈り物

7章 重ねて、最後の贈り物

あれから、学校帰りと土日休日、風の見舞いに行く事が習慣付いてきた。

風が病室からの景色以外に、と言う時は俺が外の景色を撮りに行ったりした。

日常作業的にそれを繰り返し、季節は夏本番。夏休みになっていた。

そして今日、風から良いお知らせがある。と言われ呼ばれてきた。今日は俺一人。あの二人は呼ばれなかった。きっと何か理由があるのだろう。俺も気が楽だし。

到着。病室の前。そこには風の両親がいた。親父が「愛子が呼んでいるから、早く入れ」と言っている。言われなくても。

「よお、元気か？」

「はい！ もう元気満々です」「それは良かったな」

「はい！」

なんかやたらと幸せそうな顔をしてるな。そんな顔で俺を見詰めやがって……照れるだろ。

「それで、良いお知らせってなんだよ」

「はい、私退院する事になりました！」

「本当か？」

「はい！」

「そうか、良かったな」

本当に嬉しいよ。こんなに心の底から嬉しいと思ったことはないな。昔から俺は暗く生きてきたから……

今の生活はとても幸せだ。温かさを感じる。

俺の家族は一人もない。父親は博打に溺れ麻薬を使い母と離婚をしてから刑務所行きとなった。母親は俺が中学生の時、家で首を吊って自殺した。理由は離婚した父親の麻薬仲間からの暴力、罵声、金の応酬、とにかく大変だった。そいつらも捕まり今は何もないけど。俺は父親が博打で大量に貯めた貯金やらで生活をしている。

だから、凧の側にいると幸せを感じる。家族のように思えるから。凧の父親と母親も。その温かさが嬉しかった。

「あの……正晴くん？」

「あっ、ごめん。ちよつと考え事をしてた」

「そうですか……どんな事ですか？」

「本当にどうでもいい事なんだ。凧の側にいると幸せだな、と思っ
てな」

「そうですか、嬉しいです！ それじゃあ、今からちよつと頼み事
があるんですけど……」

「なんだ？」

「今から一緒に学校に行ってください」

「写真か？」

「はい！」

「じゃあ、早く行くぞ」

「はい！」

病室の片付けも終え、凧は正式に退院した。

そして、一緒に学校に行く事に。

この時に気付いていれば……その凧の心の底を。あの笑顔が生ま
れた故郷を。

知っていたら……もう少し軽いもので済んだのに……この気持ちの
重さが。

学校。

夏休みだし人は居なかった。仕事が溜まっている新任教師達が必

死に職員室で仕事をしていた。可愛そうに。せつかくの休みが台無しだな。

「屋上だろ？」

「はい！」

いつものように、俺と凧は屋上へと足を運んだ。一步一步、なんとなく凧の歩みが遅く感じるけど……きつと久しぶりに動いたからだろう。

一日三枚しか撮れない写真。選びを選んで撮った一枚目は、やはり空だった。こいつはきつと空が大好きなんだ。

二枚目、屋上の写真を撮っていた。

「今日、私が此処に居た証拠です」と言っている。

そして、最後の一枚。そのレンズの向いている方向には俺がいた。「これは、今日私が正晴くんと一緒に居た証拠です！」

「そんなもの残さなくても……いつも側に居てやるよ……」我ながら照れる台詞だ。

「はい……お願いします」

結局、また二人とも赤面して立ち尽くした。何だ俺ら。

「もう、終わったか？」

「はい」

「じゃあ、帰るか」

「すみません……ちょっと行きたい場所があって……」

「何処だ？」

「ま……くんの……え……」照れた顔で言っていた。

「なんだって？ はっきり言えよ」

「正晴くんの家に……」

「俺の家……か？」

「はい……」

「分かった。じゃあ行くか」

「はい！」

その後聞いた話によると、今日凧の両親はあれから花売りの出張

に出ていないらしい。それで、関係者が近くにいないと何かあった時困るからと、俺の家に泊まるらしい。もう暗くなっているからその方が安全かな、とも思うが緊張度が凄い。頑張れ、俺。

そして時は過ぎ……

夜。初めて一緒に食べた夕飯はカレーだった。インスタントだけど……風は今、「病院に居たから……」と風呂に入っている。病院帰りだから洋服もあるし、一安心だ。決して、覗きなんかはしないからな！俺は……そんな人間ではない。

どうした事だろう……風が「同じ布団で寝たいです……」と上目使いで言葉を吐いてきた。きつ、緊張なんてもんじゃないなこれは……仕方ない。

消灯。

「私……正晴くんが大好きです……」

「何だよ急に！」

「すみません……」

「俺も……風が、愛子が好きだよ……」

「正晴くん……」

そして、接吻。しかも深く。初だった。俺の人生で。

一緒に寝た晩。何度も唇と唇を重ねて過ぎた時間。体も重ねた時間。

上手く進みすぎている。そんな疑問が頭に浮かんだ。が、排除しよう。風が俺を信用してくれたんだ。恋人になれたんだって。本当は俺だって嬉しいくせに。

その晩の事、後から思えば心を苦しめる、或いは温かくしてくれる、大切な一晚だった。

これが、風から俺へのメッセージだったとは気付けなかった。

ごめんな、愛子。

へ心が重なった時、君はどんな気持ちでいたの？
大切な物を残
してくれて……∨

8章 授かる想い

8章 授かる想い

凧との晩を過ごしてからもう半年が経とうとしている。

新学期、クラス替えだ。偶然にも俺と凧、幸助、瑞希は同じクラスになった。

高校生活最後の1年だし、このメンバーが揃って良かったと思う。まあ、何よりも凧と同じクラスになれた事が嬉しい。

今はもう俺達が付き合っている事は殆んどの生徒が知っているらしい。それから、凧も女友達が出来たり学校生活を有意義に楽しんでいるみたいだ。

俺はというと、男子生徒から「凧を俺にくれよ」や「あんな可愛い奴と付き合いやがって……」など俺への批判・苦情・いじめ（笑）が度々飛んできた。

お前等は今まで凧を無視してきたんだろ？ 何を今更。

そんなこんなで初めて充実した1年を送れる気がした。送れる気がした……

新学期が始まって俺達の生活リズムは変わらず、桜の木の下で俺は待ち、凧は来る。たまに遅刻してきたり。その時は初めて会った時の事を思い出して、つい笑ったりもする。だが、気になる事が1つ、偶然かもしれないが、月に1回凧は学校を休む。それは習慣のように退院したその月から続いている。俺の思い込みだと信じた。信じたい。

そんな事を思っただけで寝た夜は明け、休日の日。

俺の携帯にかかってきた1本の電話。それは幸福を俺に与えてくれた。今は……

プルルルル……プルルルル……着信は凧からだった。

「もしもし……」

「正晴くん？」

「ああ、なんだ？」

「お話があるんですけど……」

「話って何だ？」

「今から病院に来てくれませんか？」

「ああ……分かった」

悪い予感を頭の中に浮かべながら俺は凧が入院していた病院を指す。予感を消そうとするがまた自分で産んでしまう。

到着。ロビーには凧と凧のお母さんが座っていた。

「はあ……はあ……話って何だ？」

「赤ちゃんが出来ました！」

「えっ？」

「だから……正晴くんと私の赤ちゃんがお腹の中に……」

「それは本当か？」

「はい！」

「そうか……」

「嬉しくないですか……？」

「ちよつと突然すぎて……凧は嬉しいか？」

「はい！ とっても嬉しいですよ！」

「じゃあ、俺も嬉しいな」

「良かったです！」

突然すぎて驚くしか出来なかったけど、後から考えると本当に嬉しい事だ。何よりもあの凧の笑顔が嬉しかった。

聞いてみると、凧が月1回休んでいたのはどうやら妊娠のせいだったらしい。お腹の調子が悪くなったりして、もう病院に行こう。という事になって今日行く事にしたらしい。

そしたら、「妊娠しています」だってさ。高校生で妊娠か……

この先、俺は凧と赤ちゃんを守っていく存在となるのか。じゃあ、就職しなきゃいけないし、学校は行けなくなるか……まあいい。凧と赤ちゃんの為なら何だってしてやるさ。それが男って者だろ。少なくとも、俺はそんな男になりたいね。

「じゃあ、愛子。産む事にするのね？」とお母さんが言った。

「うん！ お母さん、いろいろ教えてね」

「分かりました！」

と、親子らしい会話をしていた。本当に仲が良いらしいな。姉妹のように見えるよ。お母さんは若いし童顔だからね。

「俺に何かする事はあるか？」

「する事……お母さん、男の人は何をすればいいの？」

「そうね……私が愛子を産んだ時はね、お父さんずっと側に居てくれたの。ずっと、ずっと。見守ってくれてて、それで安心して産む事が出来たんだと思うわよ」

「じゃあ俺は……」

「はい……私の側にいてください」

「ああ、分かったよ」

そんな会話をしているとお母さんが「じゃあ、これから家に泊まってくださいな」と言ってくれた。俺に両親がいない事を知っているらしい。俺は迷う事無く了解した。

それから、また数日。

俺達は一日中一緒に居る生活にも慣れ、何とか上手くやっていた。凧が妊娠している事は誰にも言っていない。陽介や瑞希に言ったら大変な事になると思うから、言える訳無い。

それでも、俺は今最高に幸せだった。

でも、これからの物語が全てだった。

今までの俺の人生が、凧との生活が夢物語のように……

終局の時、近く。

〈何か守る物がある時
でも守れない物もある〉

人は命すらも懸けられる
でも、何をし

9章 空が見える場所

9章 空が見える場所

今日、凧は調子がいいらしく学校に行くと言っていた。まだ、赤ちゃんも大きくなっていないから、体の方も平気っぽいし、お腹が膨れて見える訳でもなかった。もし膨れて見えたらちよつとマズイからな……

朝はいつも凧が起こしてくれる。凧は早起きらしく、俺がまだ心地の良い睡眠の中で出る気の無い迷路にいるように彷徨っていた。のに、凧が「正晴くくん、朝ですよ」と体を揺さぶって起こす。もう少し、もう少し……と言ってみるが、敢え無くその希望は撃沈。そんな毎日でも、凧と同じ部屋で寝て、同じご飯を食べて、同じ時を過ごす、それがとても嬉しかった。

一緒に登校。桜の木の下での待ち合わせは無くなってしまったが、必ず桜の木がある道を通る事にした。今は春、新学期が始まったばかり。桜は花を咲かせ、風にヒラヒラと花びらを持っていかれた。

まだ、学校の奴等には気付かれていないらしい。先生方には凧のお母さんと同行して事情を説明した。凧の親父はうるさく怒鳴ってはいたが、とても嬉しそうな、幸せそうな顔をしていた。「お前に愛子を渡すものか」とかいつも言っているけど、気にする事は無いだろう。

「なあ、正晴」

「なんだよ、幸助」そんなにニヤニヤなんか変な顔しやがって。まあ元々だけど。

「なんかお前、幸せそうな顔してるよな。最近ずっと」

「そうか？ いつもと変らないぞ」そんなに表に出るのか？

「まあ、ならいいけどね……」

こいつに風の事知られたら面倒になるからな。

まあいずれはこいつも知る時が来るだろう。その時までには待っていてくれ。

それから、月日は俺達を何度も明日へと明日へと運んでいった。

そして夏も近付いたある日。

いつものように、風は家でお母さんに出産について話していたり、健康面に気をつけて楽しそうに暮らしていた。その側に俺も居て。

早く産みたいんだろうな。俺だって自分の子を早く見たいさ。楽しみだ。

就職は幾つか当たったが、なかなかいい所が無かった。でも、工場の従業員とか工事現場の仕事はなんとなか良い手応えであった。準備は大丈夫だ。さあいつでも来ていいぞ。

「正晴くん！」

「なんだ？」

「写真撮りに行きましょう」

「ああ。いいぞ」

結局、この習慣は変える訳にはいかないらしい。

退院した後も、妊娠した後もずっと続けている。まあ、俺と風を繋いだモノだからいいけどな。

「今日は何処に行くんだ？」

「二つ、行きたい場所があります」

一つ目が此処。

学校の屋上。今日は休日だから生徒はほぼいない。部活をやっている奴が点々と見えるだけだ。

この場所も良い思い出の場だよな。悪い場でもあるが。

「何でまた此処なんだ？」

「この空を撮りたかったんです。正晴ちゃんと仲良くなった場所です

しね!」

「ああ、そうだな」

「私はここで正晴くんの事を好きになったんです。この、空が見える場所で」

「そうか。明日も来るか?」休日 は二日だ。明日も休みだし。

「はい!」

二つ目は……

あの桜の木の下。俺と凧が出会った、桜の木の下。

と言っても、今は夏に近い季節上、桜は咲いていないが。

そのまま家へと帰った。凧は幸せそうにカメラを抱いていた。ずっと、ギュット。

その晩。

その時は訪れた。

「おい! 凧! 大丈夫か?」

「ん……」

「凧!」

「愛子、大丈夫? お父さん車出して!」

「分かった! おい坊主、早く愛子を運べ!」

「分かった」

突然だ。こいつは突然が多すぎる。倒れてからはただ呻くだけ。

言葉にならない声を俺達に投げかけていた。

凧、俺に何を伝えたいんだ?

再び入院。

妊娠の影響もあるのだろうが、また体調が悪くなったらしい。

医師の診察が終わり、凧は個室へと運ばれた。そして、医師の一人が俺等へと近付いてくる。

「愛子はどうしたんですか?」

「娘さんの事は、もう分かっているでしょう……では、まず妊娠の事ですが……早産ですね。まだ、大きくなっていないかもしれませんが夏の間には出てくるでしょう。ただし……」

「ただし、何だよ！」

「正晴さん！」 凧のお母さんに止められた。

「産むという事になると、娘さんの命の方が心配になります」

「どうにかならないのか？」

「その時にならないと分かりませんが、もし、出産した場合、娘さんが助かる見込みは……50%以下ですね……」

「……………」

そんなのありかよ……どっちかを取れって事か。ふざけるな……

そして、翌日。

凧は目を覚ました。事情を説明すると真っ直ぐに言った。

「私は産みます。どうしても産みたいんです」

「おい！ でもお前が……」

「正晴くん……」

出産予定日まで、あと2週間。

俺は何をすればいいんだ……いや、それは分かっている。

ただ、側に居る事しか出来ない。それが俺の役目なんだ。

「貰った分だけ返さないよ それならお互い様だろ？」

君に貰った優しさの分 その分 ずっと 側に居

るよ」

最終章 明日また空の下で

最終章 明日また空の下で

凧の人生を懸けた命の誕生。どっちを助ければいいか、俺の中では既に決まっている。勿論、助けたいのは凧自身だ。残念だけど赤ちゃんは諦めるしかないと思っている。

でも凧はただ1つの事しか思っていないだろう。それは……

それから数日。

凧の事を聞いて幸助と瑞樹が病院に駆けつけてきた。

「おい、正晴。どういう事だ？」

「どうもこうも、こういう事だ……」

「あんた、こんな場所で何やってるのよ？」

その場は病室ではなく、病院入り口のロビーの椅子。凧は4階にいる。何故ここにいたのか？ そんなの決まってるんだろ……

「全部俺が悪いんだよ。会わせられる顔を持ってない。俺には何もできないし、何もする必要がない。無力で使い物にならないんだよ……」

「あんた、何言ってるの！」

バシッ。

「……………」

「正晴、テメェ！」

……………

「お前、本当にそんなので良いのかよ！ もっと良く考えろよ」

「私達は愛子の所に行くから。あんたはちゃんと考えなさい」

言われなくても分かってる。でも……もう、何もやる気が出ないんだよ……俺の真ん中に穴が空いた。何も無い。無力感しか残ってない。何だよ、これ……

ガチャ。

「愛子？ 大丈夫？」

「……はい！ 大丈夫ですよ！」

「愛子ちゃん、強がらなくていいんだよ」

「はい……」

「愛子」

「瑞樹ちゃん……凄く、凄く不安なんです……正晴くんに会えないで……私、嫌われちゃったんでしょうか……」

「大丈夫よ。大丈夫」

「そうさ、正晴はそんな奴じゃない。あいつは人を裏切るような奴じゃない。だから、泣かなくていいんだよ、愛子ちゃん」

「はい……」

「頑張れよ」

「頑張ってね」

「はい！」

出産予定日まで、1週間。

「おい正晴。いい加減決めろよ。もうあと1週間だぞ。お前は事の重大さを分かってるか？」

「そうよ。愛子、毎日アンタの事想って泣いてるんだから……」

「……本当か？」

「ああ。そうだ。正晴、お前以外に誰が愛子ちゃんを助けられるんだよ」

「…………」

「愛子が1番好きな人はアンタなんだから！」

「悪い、俺行ってくるよ」

「早く行け！」

そうだ。本当は俺だって分かっていた。風の側にいる事が俺にできる最低限にして最高の愛なんだ。それしかできない。分かっている

て何もしなかった。何故か、俺は目の前で風を見詰める事を恐れていたんだ。何もできないくせに、悩める苦労人のように格好つけていた。

そうさ、俺にできる事は1つだ。

「風……愛子」

「正晴くん……名前で呼んでくれると嬉しいです！ エヘヘ」

「ごめんな」

「大丈夫ですよ。ずっと正晴くんを待っていました。来ることも分かっていましたから。そう信じていましたから！」

「ああ。愛子、迎えに来たよ」

「はい！」

それから、俺はずっと側にいた。どんな事があるかと愛子を悲しませる訳にはいかない。そう、俺は愛子を迎えに来た。だから、離れたりやしない、今まで通りの生活に赤ちゃんを足して連れていてやる。

出産予定日前日。

愛子は少しも不安そうな顔をしていなかった。むしろ、ずっと前を見つめていた。その眼差しは遠く先を。未来を。

「正晴くん、写真撮りに行きませんか？」

「ああ、いいぞ」

「この屋上から見る景色綺麗ですよ。特に空が綺麗です」

「そうだな」

「今日も3枚。しっかり撮りましょう」

「ああ」

綺麗な青空が俺達を包む。それは優しく、温もりを感じさせた。明日をも包み込みそうな温もりを。

「愛子」

「はい？」

「明日、また写真撮ろうな」

「そうですね。または是非撮りたいです。明日……」

「ああ、撮ろう。明日また空の下で」

「はい！」

出産予定日当日。

その時は来た。

愛子は運ばれていき、俺もそれについていった。

そして、此処から先は立ち入り禁止。要するに俺は此処からは愛子の側にいてやれない。

「愛子、今度は俺が待つてゐるぞ。愛子が俺の側に来るのを」

「はい。今度は私が迎えに行きます」

「ああ」

「ねえ正晴くん。どうして私が『愛子』という名前を貰ったか前に言ったの覚えていますか？」

「いいや、覚えてない……」

「お母さんとお父さんが『人を心から愛せる子になるように』と願いを込めてつけてくれました。私、人を愛せていたでしょうか？」

「ああ。お前は人を心から愛していたよ。少なくとも俺はそれを感じていた。愛子の『愛』をな」

「良かったです！」

「ああ」

「じゃあ、私そろそろ行かないと」

「待つてゐるからな」

「はい！ 迎えに来ますから」

「じゃあ、また後でな」

「はい！」

そして……

俺は知っていた。何故愛子が俺との子供を急に作ろうとしたか。

何故3枚の写真を撮っていたか。

愛子はこの時が来る事を知っていた。だから、残したのだろう。俺に沢山のモノを。

3枚の写真。1日3枚。景色を撮っていたのはその内の2枚。俺と出会ってからは3枚の内1枚は必ず俺の姿が写っていた。会えなかった1週間も。病院から出ていく俺の背中をしっかりと見てくれた。

それよりも大切なモノを愛子は残してくれた。

季節は春。

俺は桜の木の下で寝っ転がっていた。

「何やってるの？」

「空を見てるんだ。此処は思い出がある大切な場所だからな」

「そうなんだ」

「よし、行くぞ。遅れたら困るからな。早くしろ、愛」

「うん！ 待って。お父さん！」

へ生きる力を沢山の貰ったよ。だから、この『愛』と共に、その分、返していこうと思う。ありがとう。✓

最終章 明日また空の下で（後書き）

これで、この作品は終わります。ですが、この物語自体はまだあります。今後、ご期待しててください。

外伝 明日この愛の中で

外伝 明日この愛の中で

私の名前は、古河愛^{ふるかわあい}。普通に学校に通う、女子中学生。

お父さんと二人暮らしで生活している。特に困った事も起こらないから、私はこの生活がすごく好きだ。お父さんが大好きだ。

私は、お母さんの事を知らない。小さい頃は何回もお父さんに「お母さんはなんでいないの？」と聞いていた。でも、お父さんは「いつか、愛が大きくなったら教えてあげる」と言ってから、まだ、教えてくれない。もしかしたら、忘れているのかもしれないと思ったけど、私はまだ我慢する事にした。

「お父さん、ご飯出来たよ！」

「おう」

私は中学に入学してから、毎朝、朝食を作るようになった。お父さんは毎日毎日、仕事で忙しくて、そんな余裕はないと中学生になってから気付いた。だから、お父さんのお弁当も作るようになった。「じゃあ、仕事に行ってくるな」

「いってらっしゃい！」

私も学校に行く準備をして、家を出る事にした。

学校まで歩いて行き、教室を目指して、まだ生まれたての太陽の下を心地良く歩く。これは、私の生活の「いつも」だ。これが、当たり前になっている。

学校に入って、教室に行く。そして、友達と話をする。それは、とても楽しい事だった。

「愛ちゃん！ おはよう！」

「おはよう！ 朋子」

この子は、私の親友の柳川朋子^{やなぎかわともこ}。とても明るくて、話やすくて、最高の友達だ。

他にも友達は何人もいる。朋子と他の子たちが私の席に集まってきた。いつもの朝の集会の始まりだ。何でも無い事を話しているだけなのに、それすら楽しく感じられる。

「私ね、明日お母さんとデパートに洋服買いに行くの！」
一人の子が言った。

「私も！ お母さんと遊園地に行ってくるんだ！」

皆、明日の休日はお母さんと出掛けるらしい。少し、嫉妬感が込み上げる。

「私はね、お母さんと東京に行く！ 田舎じゃあ買い物出来ない物があるからね」

朋子もお母さんと出掛けるらしい。

私の嫉妬感は徐々に徐々に、怒りへと姿を変えていった。
そして。

「何よ！ みんなお母さんの話ばかりして！ 嫌がらせなら辞めてよ！」

私は教室を出て行った。登校してきてまだ、数分しか経っていないのに。鞆も全部学校において、私は走って逃げた。

走り続けて、川原の近くの土手の桜の下まで来た。

息を切らして必死に走ってきたから、もう、足はグダグダで歩く事も間々ならない。

本当に疲れたから、もう座ろうと思って先の方にある桜の木の下を見た。そこには、寝そべっているお父さんの姿があった。

「……お父さん」

「よお、愛じゃないか。どうしたんだ？ こっちは学校の方向じゃないだろ？ ランニングでもしてるのか？」

「お父さんこそ、仕事行かないで何をしてるの？」

「ただ、寝てるだけだ」

「いつもこんな事してるの？」

「ああ、早く家を出て、時間ギリギリまで此処にいるよ」

「どうして？」

お父さんが何故此処にいるのか、すごく不思議で疑問に思った。まるで、他人を見るような目でお父さんに質問をした。

「ここは、思い出の場所だからな」

「思い出の場所……？」

「ああ、そうだ。愛こそ何でこんな所に来てるんだ？」

「それは……」

私は、朝の事をすべて話した。

友達と話をしていて、皆にはお母さんがいるのに、私には居ない事がとても悔しくて、飛び出してきたと。

その話を聞いたお父さんは、ゆっくり立ち上がって言葉を吐いた。「此処はな、俺と愛のお母さん、風愛子と出会った場所なんだ。俺がさつきみたいに寝てたら、愛子が来た。まだ、愛が小さかった時、俺は、大きくなったらお母さんの事話してやる、って言ったよな？」
「うん……」

「お母さんが居なくて悔しいと思ったのなら、もう大きくなった証拠だ。しっかり、全部教えてやるよ。風愛子の事……」

そして、お父さんは話し始めた。お母さんの事を。

桜の木の下で出会った事。一緒に昼食を食べていた事。お母さんと写真を撮っていた事。お母さんは病気だったのに、それを隠して最後にお父さんとのモノを残そうとした事。そして、私が産まれた事。全部教えてくれた。

私は泣き始めてしまった。今までずっとお母さんの愛なんか感じた事が無かったのに、今は新鮮にそれを感じられる。それが、嬉しくて、嬉しくて。

「愛、分かったか？ お前は俺だけの愛で育ったんじゃない。ちゃんと二人分の愛で育ったんだ。だから、お母さんがいなくても、もう、胸を張って生きていけ。悲しみを溜め込めるほど、お前の中は空いてない。お母さんからの生きる力が沢山入っているからな。お前は『愛』で沢山なんだ」

「うん」

「じゃあ、早く行くぞ。もう、完全に遅刻だろ？　早く行かないとヤバイぞ！」

「そうだ！　じゃあ、お父さん行ってくるね！」

「ああ、行ってらっしゃい」

私はまた、学校に向かって走り始めた。

学校に着いたら、ちゃんと朋子達に謝ろう。

皆は休日をお母さんと過ごすらしい。

それは、とてもとても素晴らしい事だ。憧れないなんて事ははつきり言うとなない。まだ、嫉妬感は確かに一握りある。

でも、私だって、休日過ごせる場所がある。

私は、明日この愛の中で過ごそう。

外伝 明日この愛の中で（後書き）

思った以上に読者の方々の数が多くて驚いています。なので、今回はその後の『愛』の話を書いてみました。本当にちよつとの話ですが、これを読んで「明日また空の下で」の『愛』知ってください。そして、皆さんも一人ではない。と知ってください。貴方の両親は貴方に悲しみが溜まらないくらい、『愛』を注ぎ込んでいます。読んでくださり、ありがとうございます。これから宜しく願います。では、またどこかで……

愛の花言葉

大切な人を無くしても 出会った歴史は確かにあって
大切な人を泣かせても 涙の歴史は貴方にあって

同じ色をしていても 同じ意味は1つもなくて
違う形をしていても 同じ意味の『愛』であって

貴方が授かった名前
それは一つしかない 花言葉

無くさないで いつだって貴方の側にある
散った花びらが 残した愛の花

忘れないで 二人で見た空がある事
色は忘れても 一緒に見た事を 忘れないでください

あの人が残してくれた 生きる意味の分 返さないと
あの人が与えてくれた 優しい笑顔の分 返さないと

大切な人と得た思い出
この世に一つしかない 宝石箱

泣かないで 貴方が居た歴史は確かにある
あの人の心にも 貴方の心にも

笑っていて 二人で居た証拠は確かにある
二人で見上げた空を 思い出として 残してください

君に会いたい だから 明日また空の下で
君を待っている だから 明日また空の下で

同じ時を過ごした分
同じ想いは溜まっていった
二人分の 宝石箱に

無くさないで 大切な人に貰った優しさを
忘れないで いつも 一緒に居た事を
どうか 忘れないでください

無くさないで いつだって貴方の側にある
散った花びらが 残した愛の花
忘れないで 二人で見た空がある事
色は忘れても 一緒に居た事を 忘れないでください

大切な人に貰った 愛の花言葉を
忘れないでください

いつまでも 忘れないでください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9695c/>

明日また空の下で

2010年10月8日15時36分発行